

# 翻訳理論言説の背後にある隠喩の社会記号論による一考察

河 原 清 志

Kiyoshi KAWAHARA

## An Observation on Metaphors behind Translation Theory Discourse from Social Semiotics

### 1. はじめに

本稿は、「翻訳」という概念をめぐる語り口が極めて多様化していることを受けて、「翻訳」という言語的・社会的行為の背後に潜む比喩を翻訳学その他の学問の先行研究から詳らかにし、以って翻訳学ないし翻訳現象を研究の対象にしている研究者が翻訳をいかに多様な視点から捉えているかを明らかにすることを目的とするものである。

近時、通訳翻訳学が文化的・イデオロギー的・社会的転回を経験したこと（Bassnett & Lefevere, 1990; Cronin, 2002; Snell-Hornby, 2006; Pym, Shlesinger & Jettmarova, 2006など）に呼応して、通訳学の世界では特にコミュニティ通訳をめぐるその社会行為性に焦点を当てた「通訳者」の役割論が脚光を浴びている（Angelelli, 2004a, 2004b; Pöchhacker & Shlesinger, 2007など）。この役割論は認知言語学の観点から見ると、「A が X として（“as”）の役割を演ずる」という時、A＝通訳者、X＝多変項、として捉えられ、通訳者を語るメタファーとして X に様々な変数を代入することで、通訳者の役割の本質に迫るというものである（河原, 2009）。他方、翻訳学では、Munday (2008/2012) 第9章に見られるように、社会学的な観点から「翻訳者」の役割論が論じられており（Simeoni, 1998; Hermans, 1999, 2007; Buzelin, 2005; Wolf & Fukari, 2007など）、これは翻訳者を「不可視な存在」（Venuti, 1995, 2008）、「介入者」（Maier, 2007; Munday, 2007）、「破壊的執筆者」（Levine, 1991）などというメタファーで語ることによって、翻訳者の役割の本質に迫るものであると言える（河原, 2009）。

この動向は、通訳翻訳学を通じて、近年、テキストや文化よりも通訳者・翻訳者についての研究が主役になってきていること（Munday, 2008, p. 158）に対応する。確かに、「人」に着目した研究を行うことで、通訳者・翻訳者がなぜある特定の状況下で一人ひとり異なる行動を取り、その原因（Pym, 2006）は何かの解明にはつながる。しか

し、「人」に着目し社会学的な考察に絞ることで却って通訳・翻訳の全体にわたる多面性・複層性が見失われかねない。

そこで本稿は、翻訳行為と翻訳者の両者をめぐる比喩（直喩及び隠喩）を先行研究から広く抽出して分析、分類することで、翻訳学が有するさまざまな視点から複眼的に「翻訳」の本質に迫ってみたい。なお、通訳も翻訳の下位概念ではあるが（Pöchhacker, 2004, p. 9）、通訳をめぐる比喩は論を改めたい。

## 2. メタファー論と学問語用論

「A が X として（“as”）の役割を演ずる」という言語形式を一般論として敷衍すると、「A as X/X としての A」（直喩；シミリー）、「A be X/X である A」（隠喩；メタファー）となる。厳密に言えば、“as”は中核的意味として「等価」（equivalence; equal value）を表しており（河原, 2008）、本来、被説明項 A（explanandum）とは異なる説明項 X（explanans）を、A と等しい（equal）価値を有するもの（value）と看做すことによって、その本質的一面を詳らかにするレトリックである（下記の谷口, 2003 (2)参照）。そして、隠喩形式の場合は、言語表現上比喩であることが隠れているが、「A be X/A は X である」という言語形式には記述文・定義文・隠喩文の 3 つの機能があり（田中, 2002）、隠喩文として直喩文と同様の機能を有する（“as”にも記述・定義の機能もあるが、詳細は次節に譲る）。

このことを踏まえて、学問の方法論としてのメタファーについて考えてみると、哲学者マックス・ブラックが、「おそらくすべての科学はメタファーから出発し、代数に終わる。そして、おそらくそのメタファーがなかったら、代数はついに存在するには至らなかったであろう」（Black, 1962）と言ったように、あらゆる学問はメタファーによって支えられて展開していると言える。翻訳学もその例外ではない。理論（θεωρία; theoria）とは研究対象をどのように見るか、という見立ての問題であり（Chesterman, 1997, pp. 1-2）、認知意味論の出発点としてメタファー論の転回を見せた Lakoff & Johnson（1980）のメタファーの本質を要約すると次の点に集約できる（谷口, 2003, pp. 9-44）。

- (1) メタファーの本質は、ある事柄を他の事柄を通して理解し、経験することである（経験基盤主義）。
- (2) 人間の思考過程の大部分がメタファーによって成り立っている（主観的意味論）。
- (3) 人間の概念体系がメタファーによって構造を与えられ、規定されている（カテゴリー論）。

通常、メタファーは、それによって比較的抽象的な、あるいは本来充分な構造を持たない事柄を、より具体的で構造化された事柄によって理解することができるという性質（上記(1)(3)）があるとされている（Lakoff, 1993）。“A as X”の形式で言うならば、A という抽象概念を X という具体的で構造化された事柄によって理解する、というものである<sup>1</sup>。これをパース（C.S. Peirce）の記号作用の三項関係の観点<sup>2</sup>で論じると以下のようになる。平賀（1992）によると、パースのいうメタファーは詩においては意味領域・概念構造の写像であり、日常言語においては概念構造・統語構造間の位相的写像であるとしている。例えば、X（目標領域）を Y（起点領域）に喩える（X is Y. ; X as Y.）場合、Y が X だと類像的に認知される（即座に認知される）場合、解釈項を介在せずに当該比喩が理解されるため、これは創発性のない死喩である。他方、Y が X だと即座には認知されず、第三項を介して、つまり解釈項を経て当該比喩が理解される場合は、解釈者の長期記憶ないしスキーマに類像性を認識する基盤がないため、発話者の意図する比喩の意味を類推したり斟酌したりする創造的記号解釈を伴うこととなる（即興での記憶連鎖の引き込み合いによる意味生成）。つまりこれは象徴性の高いメタファーであり、創発性に富んだものであると言える。しかしながら、この創発性に富むメタファーも言説が一般に受容されて一般化、体制化することにより類像化するというプロセスを経るにつれて、その創造性が弱まり、逆に類像性が強くなる、つまりパース流のメタファーに接近するという記号過程を経ることになる。

以上をまとめると、類像的に作用するメタファー（パース流のメタファー）は一般的に創造性が乏しい反面、ステレオタイプ性が強く慣用性が高い。他方、象徴的に作用す

---

<sup>1</sup> なお、Johnson（1987）の‘embodied schema’（身体的な基盤をもつスキーマ）、Grady（1997）の‘primary metaphor’（身体的・空間的経験と言った即物的で具体的な経験をそのほかの種類の経験（感情、心理状態、社会的経験など）と共起させることによって構成される比喩）なども参照。

<sup>2</sup> 記号一般について、対象（object）と記号（sign）との間に大きく、類像性（iconicity）、指標性（indexicality）、象徴性（symbolicity）という記号作用がある。これを社会の中での記号作用という観点（社会記号論）から捉え直すと、次のようになる。まず、①この類像性は、対象（Object; O）と記号（Sign; S）とが同一／同等／類似／相似的であることを示す記号作用であり、指標性は S が O の存在を示す作用、象徴性は S と O は恣意的な関係であることを示す作用となる。そしてこの記号作用は解釈項（interpretant；解釈者による解釈）を通して「対象≒記号」であると解釈者が見なす、つまり両者の間に等価性を見出すという記号に対する人の認知作用であると位置づけられる。

ここで類像性に関し、パースは更にその抽象度に応じて、(a) イメージ<(b) ダイアグラム<(c) メタファーに三分類している（ $a < b < c$  で抽象度が大きい）。(a) イメージは実体の直接的類似、(b) ダイアグラムは構造の対応的類似、(c) メタファーは構造の並行的類似を特徴とし、顕現様式としては(a)は視覚的・聴覚的な様式、(b)は聴覚的・視覚的・概念的な様式、(c)は概念的な様式となる（平賀，1992）。本稿にいう「パース流メタファー」はこの(c)に該当する。

るメタファーは一般的に創造性・新規性・斬新性・意外性があり、新たなものの見方を提示する事態構成員を持つ<sup>3</sup>。

以上を承けて、学問におけるメタファーとしての“as”の語用のあり方を考察すると、メタファーの一般的な特徴を表した用例もあるが（例えばテキスト言語学の言説であれば、text as a window / text as a reading material / text as father）、むしろ、AよりもXのほうが抽象概念であることも多々ある（例えば、text as icon / text as metaphor / text as construction）。いわば、抽象概念を抽象概念によって操作定義、特徴記述などを行うという特徴が概ね観察できる<sup>4</sup>。

このことを、学問の場における語用論（学問語用論と名づける；河原，2008）として捉え直しをするならば、次のようになる。まず、学問的言説の生成者たる研究者は、A-as-X という言語形式によって、A（学問的考察の対象たる抽象概念）をXによって定義づけ、特徴づけ、説明し、概念の考察を深化させることで学問的真理を探究する。

---

<sup>3</sup> この「学問語用論」（academic pragmatics）を考える上でのメタファー機制に関しては、田中・深谷（1998, pp. 152-155）の次の記述が参考になる。要約し趣旨を抜粋しつつ、自説も織り交ぜる。

- ・言葉使いを共有するプロセスを説明する際に有効なのは、「型を設え、型に填める」というブルデュー（P. Bourdieu）の考え方である。ブルデュー（1993 [1982], pp. 201-243）が言及している専門家集団の言説の体制化を取り上げると以下ようになる。専門家集団は言語を組織的に編成し、専門言語の生産・再生産を行う。そこでは理論言説が作られ、ある言説が流通する場（コミュニティ内）で、型に填まらない、つまり当該コミュニティの規範に沿わない言表を排除しようとするサンクション機制が働く。当該コミュニティ内では自身の学説を主張する際、専門家集団に帰属する成員である限り、完全には当該コミュニティから自由にはなりえない。言説の型が制約を与えるからである。たとえば言語学者であれば、認知言語学、社会言語学、生成文法学派のどの陣営に与するかで、研究の対象、対象の意味づけ方、表現の仕方が異なる。これは言説間の「非共約性」と呼ばれる現象を生み出す。ブルデューはこうした言説の生成を「表現上の利害関心と言説が循環するその場の構造によって構成される検閲との間の妥協の産物」と見なしている。
- ・ボイド（Boyd, 1979）は、「メタファーの生産性」に注目し、メタファーと理論言説の関係について説明している。まず、ボイドは文学的なメタファーは個人によって使用され、使い古されるとその効果が失われるが（つまり、本稿の言う象徴的に作用するメタファーとして斬新なメタファーを提供するのが文学である）、「理論構成的メタファー」の方は、研究集団によって使用され積極的に使われることにより定着すること（本稿の言う類像的に作用するメタファー（パース流のメタファー）として当該コミュニティの中で体制化・固定化されること）を指摘している。さらにボイドは、メタファーを“reference-fixing device”（「指向対象固定装置」）と呼び、メタファーから得られる視点が研究対象を固定する重要な役割を果たすという。そしてある学説の仮説検証の研究過程は、メタファーによって示された類似性を明らかにし、洗練させていくプロセスだという。したがって厳密な定義を欠くメタフォリカルな言表が理論言説に組み込まれ、それらを精緻化する作業が研究活動では必要になる。そこでボイドは、理論言説を構成する視点としてのメタファーは「帰納的に開かれている（inductive open-endedness）」というのである。

この時、X としては、個別化可能なもの（具体名詞）、そして言及指示可能なもの（抽象名詞）を使用する。

そのうち、(1) 具体名詞の抽象度が低いものであれば、直接的に写像を動機づける共起性によって具体的なイメージを伴った意味づけが行われるであろう。

(2) 具体名詞の抽象度が高いものであれば、類似性に基づいて A、X 両者に何らかの共通点を見出しながら（田中の言葉を借りると、連鎖を介して記憶を呼び込み取捨選択し、加工、変形して纏め上げる作業、つまり「記憶連鎖の引き込み合い」；田中・深谷 1998）、より創造的な意味づけが行われているであろう。

(3) (抽象度の極めて高い) 抽象名詞であれば、経験的基盤を欠く解釈共同体の集合表象を表す象徴記号であり、特定の集合的解釈体系（ここではアカデミア）のトークンであるので、特定の学問分野の専門用語としての概念定義を背後に持ちつつ、その分野特有の解釈体系による意味づけを行いながら言葉を使用するであろう<sup>5</sup>。

ここで研究者は、かようなトークンとしての学術用語を使用し、そして各専門ごとの言説の「型」に填まった言説の展開によって（言説の類像的な反復；詩的機能性）、その学問的言説の生成者たる研究者の帰属する学問共同体を指標する、というマクロ・コンテキスト関係にあるといえる（類像記号の社会指標作用）。そして、その読者である他の研究者は、その言説の「型」を繰り返し「なぞる」ことによって当該学問コミュニティへと参画し、やがてはそこへ自らのアイデンティティを見出す、というプロセスを経ることになる（指標的類像化; indexical iconization; 小山, 2009, p. 198）。

また、一回一回の言説は語用実践行為として常に状況づけられており（メイ, 2005 [2001], p. 329）、「状況の参加者達は、自分たち自身の発語を、そして他の参加者達の

---

<sup>4</sup> この点、メタファーの一般論として、概念混合 (conceptual blending) あるいは概念統合 (conceptual integration) という認知的作用から説明するもの (Fauconnier, 1997; Fauconnier & Turner, 1998)、異領域間写像としてのメタファーとして類似性と共起性を唱えるもの (谷口, 2003) などもあるが、いずれも（学問的）言説空間における相互行為性のダイナミズム（弁証法的プロセスによる究極的論理的解釈）が考慮されていない。この点、コトバの使い方が個人内だけでなく、個人間でも連鎖的に伝播し、ある「語りの形」が整えられると同時に、その結果としての「型」が共有されるようになる、というメタファー機制による連鎖的伝播論（田中・深谷, 1998, pp. 152-158）は、学問のダイナミズムを語る上で有効であろう。

<sup>5</sup> 若干例を挙げると、(1)の例として「感覚は弁別器・測定器」「認知は鋳型」「人格は樹木の年輪」など、(2)の例として「認知はデーモンの行い」「学習は鋳型のあてはめと調整」「流れとしての思考」など、(3)の例として「意味構成システムとしての社会 (N. ルーマン)」「コミュニケーションとしての社会 (J. ハーバーマス)」「ハビトゥスとしての社会 (P. ブルデュー)」などがある。(1)(2)は『比喩から学ぶ心理学』（田邊, 2000）、(3)は『社会のイメージ—社会学的メタファーの諸相』（小林・福山, 1991）から、章または節の見出しの一部をここに挙げた。



発語を、受け入れること自体により、そこで発語が発せられ、そこで彼らが発語者となるような社会状況を確立し再生する」のである（メイ、2005 [2001], p. 330）。かようにして、言表の連鎖的伝播の営みが学問的相互行為によって行われ、その際に学問的言説空間の中でメタファーによる機制が極めて大切な役割を演じていると言えるし、その一つの言語形式が、“as”である。

このように、メタファーの機制に支えられて抽象的・概念的な理論構築は展開されていると言える。そして、「翻訳をXとして見なす」というメタファー使用は、社会記号論的には、「翻訳 $\equiv$ X」という類像的な記号作用を持ちつつ、そのような見立てを行う行為者ないし理論家の社会的属性を（前提的に）示しつつそれを（創出的に）強化するという社会指標化作用を有していることになる（social indexicalization）。さらには、理論家の有する価値観・信念体系といった象徴的世界観が言語ないし翻訳イデオロギーとなって理論構築に作用する側面もある（symbolic iconization）。

以上をまとめると、①「翻訳 $\equiv$ X」であると見做す行為が理論構築の土台にあり（理論の類像性）、これと同時に、②この「翻訳 $\equiv$ X」は特定の学術コンテキストで生起する理論構築行為であり、社会文化史的コンテキストの負荷性を有するもので、このような理論構築行為自体のコンテキストを指標する記号作用をも有する（理論の社会指標性）。さらに、③理論家が信奉している非経験的な共同幻想（イデオロギー）や価値信念体系といった象徴的世界観が理論に対する意識となって作用する側面もあり（理論の象徴性）、これらの複合的な意味構築行為が理論構築行為であると言える。1つのテーゼにまとめると、以下ようになる。

[学問語用論に関するテーゼ] 言語による理論化の過程は、<sup>(A)</sup> ①類像作用、②指標作用、③象徴作用が三位一体となった社会的な指標的類像化、象徴的類像化の複合的な過程であり、<sup>(B)</sup> 類像的な言説の反復使用（詩的機能）により、社会的類像化が更新され強化されるという社会的な意味構築と意味改変を繰り返す、<sup>(C)</sup> 非合目的効果<sup>6</sup>を伴った過程である。

では、“as”を使った言説が学問空間及び翻訳学の言説空間の中でどのような機能を担っているかについて検討する（本稿では上記テーゼの（A）を中心に検討する）。

---

<sup>6</sup> 行為者の目的意識などに基づかず、行為者の意識には、そのままのかたちでは、ほとんど上らないが、それにもかかわらず、現実の社会において作用している機能のこと（小山、2009, p. 241）。

### 3. 翻訳学の方法論と“as”の解釈学

翻訳学における学問体系の構築の仕方として、Chesterman (2007) は、(1) 神話、(2) メタファー (例：ミーム、書き換え、ローカリゼーション)、(3) モデル (例：比較対照モデル、プロセス・モデル、因果律モデル)、(4) 仮説 (例：解釈的仮説、記述的仮説、説明的仮説、予測的仮説)、(5) 構造化された研究プログラム (例：多元システム論、第三のコード)、を挙げている。そして、Chesterman (2008) は、上記(4)の中の解釈的仮説として「解釈論的“as”」を唱え、“as”の機能として①表示または象徴としての“as” (同定)、②隠喩または類推としての“as” (類似)、③分類としての“as” (上位語)、④構成素としての“as” (下位タイプ)、⑤定義としての“as” (説明)、を挙げている (但し、この①～⑤の分類は本稿で学問語用のメタファー分析をする上ではそれほど有益ではないため、これを援用した分析は割愛する)。同論文では「解釈論的“as”」を解釈的仮説に位置づけてはいるが、これは同時に上記(2)でもあり、ボイドの言葉を咀嚼するならば、「理論構成的メタファー」は「指向対象固定装置」となり、解釈的仮説を検証していく研究プロセスによって、厳密な定義を欠く比喩的な表現が理論言説に組み込まれ、それらを精緻化する作業を通して、研究対象が明らかになる。つまり理論言説を構成する視点としてのメタファーは「帰納的に開かれている (inductive open-endedness)」のである (Boyd, 1979)。

そこで、学問語用論の見地から (「翻訳行為」、「翻訳者」を含む) 「翻訳」をめぐる比喩を、先行研究から広く抽出する作業を行う。まずは“translation as X”のXを抽出し、それぞれのXがどのような機能を担っているか検討し分類する。そして、それぞれのXにどういう含意があるか、どういうコンテキストでXが主張されているかを検討し、メタファーが拠り所としている視点の位相空間を同定し、背後にある社会文化史的コンテキストを析出する、という手順で分析を進めることにする。

### 4. 翻訳諸理論のメタファー分析

上記のように翻訳理論の背後にあるメタファーを析出するには、翻訳に関する定義文「翻訳とはXである」という言明の説明項 (以下の分析における下線部がこれに該当する) を分析することになる。そして、この説明項Xは翻訳の機能をも表象する<sup>7</sup>。そこ

<sup>7</sup> M. ハイデガー (M. Heidegger) の『存在と時間』に「～として構造 (Als Struktur)」 (英語で言うところの“as-structure”) があり、我々の日常経験はすべて、<～として>というある意味を担った形で我々に対して現れる。すべてのものは意味を担う存在として我々は受け止め、引き受けると同時に、そのような営みを行う人間存在もまた、ある意味を担う存在として全体的世界を構成し、それらが常に変化し続けるという構図を持つ。したがって、「AとはXである/XとしてのA」という言明はAがXとして意味を為し、機能し、価値を構成することも含んでいる。

で、まずはこれまでの先行研究の主要なものを拾い、性質・機能別に分類し、そのうえで諸学説の社会的コンテクストを若干考察する。（一部、「翻訳者」の役割についての定義文もあるが、同旨と考えられる。）社会的コンテクストを分析するにあたり、翻訳の根源的概念である等価概念を基底にして翻訳学の諸学説を上述の「学問語用論に関するテーゼ」も踏まえて類型化すると、以下のような五類型となる（河原，2015a）。

- ①言語等価論：言語テキストをめぐる学説群
- ②社会等価論：目標言語における翻訳の社会機能をめぐる学説群
- ③等価誤謬論：翻訳の社会文化的イデオロギー性をめぐる学説群
- ④等価超越論：翻訳哲学・思想に関わる学説群
- ⑤等価多様性論：翻訳のジャンルやテキスト・コンテクストの多様性に関する学説群

#### (1) 翻訳行為自体の本質・機能

- ①翻訳は「技芸 (art)」（意味重視の翻訳の場合）、「技術 (craft)」（コミュニケーション重視の翻訳の場合）である。（Newmark, 1981, p. 39）
- ②翻訳者の役割は、使える選択肢の中から選択して、メッセージのニュアンスを表現すること。（Vinay & Darbelnet, 1995, p. 16）
- ③翻訳とは推論（inferencing）と解釈の因果モデルに基づくコミュニケーションの一例である。（Gutt, 1991/2000）

これらは「言語等価論」の諸学説で、主に言語処理やコミュニケーション行為の性質それ自体に関する言説が中心である。特に特定の社会の中での機能を説くのではなく、あくまでも言語テキストの処理の仕方やその認知的プロセスを分析対象にしていると言える。①はドイツにおける翻訳実務教育が目的であり<sup>8</sup>、②は英仏語間の翻訳手順を二言語間の言語構造を基に明示することが目的、③は関連性理論によって翻訳行為の一切を説明することが目的の理論である。各理論言説の背後にあるのは、何を合目的機能として理論を定立するかにあると言える。

これらの諸理論は、（詳細は割愛するが）社会言語学的多様性を捨象して一枚岩的な言語を想定し、そのような言語観に立脚して学説を定立している。その意味で、言及指示機能中心主義と言語ナショナリズムという言語イデオロギー（非合目的機能）が最も濃厚に現れる局面でもある（詳しくは、河原，2015a を参照）。

---

<sup>8</sup> Newmark (1981) と Newmark (1988) は翻訳者の訓練コースで広く使われている本である。



## (2) 目標社会における機能

- ①翻訳は、コミュニケーションを別言語で引き継ぐものではなく、先行するコミュニケーションについての新たなコミュニケーションである。(Reið & Vermeer, 1984/1991, p. 66)
- ②規範が規制する活動としての翻訳 (Toury, 2012, 第3章の見出し)
- ③言語間翻訳は「起点テキストからの翻訳行為」であり、一連の役割や関係者が関与するコミュニケーション過程として説明される。(Holz-Mänttari, 1984)
- ④翻訳は、誰が見てもはっきりと分かる書き換え (rewriting)の典型である。(Lefevere, 1992, p. 9)
- ⑤翻訳は本質的に暴力的である。(Venuti, 1993)
- ⑥翻訳とは、中国にとって社会変革の促進行為である。(Kenan, 2002)

これらは、「社会等価論」(①②③④)または「等価誤謬論」(⑤⑥)の関与・介入分析型<sup>9</sup>の諸学説で、目標社会のみに焦点を当てて翻訳の社会的機能について分析するものである。例えば、①はドイツのスコボス理論、②はイスラエルの翻訳規範論で、翻訳を規制する目標文化内の最も主要な要因を析出する学説である。また、④はベルギーのルフェーヴル (A. Lefevere) による主張で、文学テキストは権力、イデオロギー、制度などの要因で「書き換え (rewriting)」を余儀なくされ、権力的地位にある人々が一般大衆による消費を支配しているのに呼応して、翻訳テキストも権力によって統御されているとする (Lefevere, 1992)。これは目標社会内での支配的イデオロギーや支配的詩論によって、翻訳は原テキストの表象が歪められるとするものである。

⑤はアメリカのヴェヌティ (L. Venuti) の主張で、同化 (domestication) 方略を採ることによって、翻訳はアングロ・アメリカの主流文化に反映される自民族中心主義を後押しする暴力行為となるという主張である (Venuti, 1998)。⑥は中国の Kenan による主張で、中国において翻訳は社会変革のための触媒となってきたという。「1970年代後半に中国が諸外国に門戸を開放して以来、中国は 国家の発展および人民の幸福のために有益で役立つものなら何でも導入する方針を決めた。この過程において、翻訳は不可欠なのである」(Kenan, 2002)。これらは、一言語社会内における翻訳の受容過程における翻訳の歴史的・社会的機能に焦点を当てた議論である。同様の議論は日本にもある。以下は、その引用である。

---

<sup>9</sup> 翻訳学説のうち翻訳イデオロギーを扱った「関与・介入分析型」「批判理論型」「介入主義型」の学説の詳細については、河原 (2015b) を参照。

- ⑦福沢は「全集緒言」で、「吾々洋学者流の目的は、唯西洋の事実を明にして日本国民の変通を促し、一日も早く文明開化の門に入らしめんとするの一事のみ」と概括している。彼はまた「世俗通用の俗文を以て世俗を文明に導くこと」ともその決意を表明していた。(吉田, 2000)

当時、翻訳によって先進西洋文明を受容し、日本国およびその国民を文明開化させるという役割を翻訳が担っていたのである。このように、良きにつけ悪しきにつけ、翻訳は目標社会内での複雑な権力構造の中で大きな機能を担っているといえる。

これらのメタファーを通してわかるのは、それぞれの主張がどの目標社会を想定して翻訳の社会機能（合目的性）を論じようとしているか、である。「社会等価論」は、通社会的・普遍的に妥当する翻訳の原理を主張しようとしているのに対し、「等価誤謬論」は個別の目標社会内での翻訳の社会的機能を分析しようとするものであることが観察される。特に、ヴェヌティが典型であるが、介入分析を通して、介入主義的な方向へ議論を展開しようとしている主張には、翻訳には非合目的機能があることを主張し、それに対する「抵抗」を示すよう呼びかける主張まで含んでいる点である。戦略的に非合目的機能を利用している、とも言えるだろう。

これらの学説、特に「等価誤謬論」で特徴的なのは、目標社会を照射すればするほど、その反射項たる起点社会との関係性が浮き彫りになる点である。この点において、国家主義、言語ナショナリズムをイデオロギー的前提とした学説を展開していることが観察される。

また、「社会等価論」の諸学説で特徴的なのは、これらが目標社会のコンテクストを重視して目標社会を指標すればするほど、その社会が起点社会とは明瞭に区別された存在体として意識されていることである。特に②の翻訳規範論では、均質的な翻訳者コミュニティ（メゾ社会レベル<sup>10</sup>）が想定され、一定の規範が一律に翻訳者を規制するかのとき立論を行い、その立論を推し進めることで翻訳普遍性として法則化する（マクロ社会的な普遍性の分析を行う）ことを目的にして、それによってある種の翻訳の科学性を追求しようとしているがために、言語ナショナリズム的イデオロギーが強く内包されているという非合目的機能が観察されるのである。これは④のリライト理論も同様で、これはもともとイヴン＝ゾーハー（I. Even-Zohar）の多元システム論という目標社会志向の学説に端を発する理論群の特徴であるように思われる。このことは、①についても同じように妥当する。③はコミュニケーション過程を関係者諸氏という「人」の関係

<sup>10</sup> 翻訳者コミュニティという翻訳者が属している（と思われる）職業コミュニティと翻訳者個人との関係性に関する水準のこと。詳しくは、河原（2015c）を参照。

網として描くので、その意味ではナショナリズム的な色彩は弱い、その分、社会言語学的多様性を重視しているわけでもなく、やはり他の諸理論同様、多層的・多面的な翻訳行為のごく一部を照射した理論でしかないことが観察される。

### (3) 起点社会＝目標社会間における機能

- ①翻訳者は社会学的な主体、経済的主体、文化的創造者、そして言語産出者という多岐にわたるものとして見ることができる。(Mossop, 2007, p. 36)
- ②翻訳とは、南北格差助長行為である。(Yameng, 2007, pp. 54-55)
- ③翻訳とは、翻訳者の立ち位置を反映したイデオロギー行為である。(Tymoczko, 2003)
- ④翻訳とは、権力関係構築行為である。(Jaffe, 1999)
- ⑤実践としての翻訳は、植民地主義のもとで機能する非対称的な権力関係を形作ると共に、その中で自らを具体化していく。(Niranjana, 1992, p. 2)
- ⑥翻訳者はもはや異なる二つの極の仲介者ではなく、翻訳者の活動は差異を内包する文化的重なりの中に刻みこまれるものである。(Wolf, 2000, p. 142)
- ⑦文化レベルでの翻訳は、領土レベルでの翻訳に対応する。前者はイングランド文化の受容であり、後者は住民の強制的な退去と移動を意味している。(Cronin, 1996, p. 49)

この学説群は、「等価誤謬論」の関与・介入分析型の諸学説である。例えば、①はカナダの Mossop の主張で、翻訳者は声 (voice) の選択において主体性があるという。基本的に翻訳という間接話法状況にある翻訳者が選択しうる声には、翻訳者の声、読者の声、原著者の声、翻訳依頼者の声、の4つがあり、前者3つのいずれかを選択する（ないし反映させる）ことは文化的創造者・言語産出者としての翻訳主体の表れであり、後者を選択することは翻訳者が社会的・経済的主体であることの証左であるという (Mossop, 2007)。これは起点テキストの翻訳は目標社会における間接話法的状況であり、その間接性にどのくらいコミットするかは翻訳者の文化・社会状況に拠る、とするものである。②は中国の Yameng の主張で、北＝南間、および南＝南間における翻訳に表象の歪みがあり、南北の格差が助長されるという (Yameng, 2007)。何を、どう訳すか、についての判断が、発展途上国に関する十分な知識に基づいて行われていないため、戦争、占領、恐怖、病気、貧困などについての共感と理解が欠如し、歪んだ表象が翻訳によって作られるとするのである。③はアメリカのティモツコ (M. Tymoczko) の主張で、翻訳のイデオロギーは翻訳者がどういう政治的な立ち位置 (position) を取

るかによって決まるのであり、これはインド出身のバーバ（H. Bhabha）の言う狭間の領域（space between）とは異なるとする（Tymoczko, 2003）。翻訳はほとんどの政治的行為同様、社会に参画し社会的変革を興す有効な手段だと見る見方を反映している。④はアメリカの Jaffe の見解で、フランス語からコルシカ方言への翻訳は、フランスによるコルシカ支配への政治的抵抗という意味合いがあり、翻訳は言語や文化の権力関係を前面に押し出すものだという（Jaffe, 1999）。

すべての翻訳にはその基底に政治的な側面がある。一回一回の翻訳行為は複数の言語や複数の文化の間に（平等または不平等な）権力関係を築いてしまうからである。〔中略〕 翻訳はメタ言語的、メタ文化的活動であって、翻訳以外の執筆形態であれば日常生活に埋没し陰を潜めているような複数の言語的な価値や権力のモデル、言説のモードの間の対照や対立を顕在化させてしまう。（Jaffe, 1999）

これに関連して、何を訳すかということについて⑧の見解が目を引く。

⑧翻訳は概して一方通行である。弱小国は大国の文学のうち自国語に翻訳する価値があるものはすべて矢継ぎ早に翻訳するが、逆は成り立たない。弱小国は（大国に対して）偏狭な見方や無視した姿勢を取るわけにはいかないが、大国は弱小国に対してはそういう姿勢を取ることができるのである。（Boldizar, 1979 in Jaffe, 1999）

⑤⑥⑦も含め、これらの学説群は「起点言語の国家（ないし共同体）」＝「受容言語の国家（ないし共同体）」の間の権力不均衡からくる翻訳の政治問題を提起していると言えよう。

これらは「等価誤謬論」の名のとおり、翻訳テキストの等価性の吟味よりも、起点社会＝目標社会間で翻訳がどのような機能を担っているかについて社会的コンテクストを分析するのが主眼の学説である。翻訳実践行為に対する分析であるから、メタ語用論的解釈を示したものだと言える。その意味で、翻訳実践者・実務家にとっては彼ら彼女らの非合目的機能は意識化されないものであるが、これらの諸学説はそこを詳らかにしているのである。

と同時に、②⑤⑦⑧に見られるように、起点社会・目標社会間の差異、格差に着目しているがために、言語を一枚岩的に見る言語ナショナリズム的な性格も色濃く有している（学説の有する非合目的機能）。この点、アイルランドのクローニンの欧州的＝言

語イデオロギーを暴いた小山（2011）を参照。

#### (4) 起点社会＝目標社会を超越した機能

- ①翻訳とは、意図的・意識的な知の創造・文化形成行為である。（Tymoczko & Gentzler, 2002, p. xxi）
- ②翻訳とは、女性にとっての新たな文化的ダイナミクスの創造に参画する強力な道具である。（Simon, 2002）
- ③私の翻訳実践は、女性に資するために言葉を語らせることを目的とする政治的な活動である。（Gauvin, 1989, p. 9）
- ④翻訳とは、先行する文化を再び造り直し、新たなやり方で将来の展望を明示する文化構築行為である。（Gentzler, 2002）
- ⑤翻訳は批判行為であるべきで「中略」、疑義を呈し、読者に疑問を投げかけ、原文のイデオロギーを再コンテキスト化するものであるべきだ。（Levine, 1991, p. 3）
- ⑥良い翻訳とは「中略」、不可入性と侵入との、そして手に負えない異質さと「安住感」との対立が、決着のつかないままに、しかし表情豊かに残るような翻訳である。（Steiner, 1998, p. 413）

これらは、「等価誤謬論」の関与・介入分析型の諸学説（①④⑤⑥）と、積極的な介入主義型のもの（②③）とがある。例えば、①は翻訳に内包する政治・イデオロギー的な操作性を指摘するもので、アメリカのゲンツラー（E. Gentzler）とティモツコ（M. Tymoczko）の見解である（Tymoczko & Gentzler, 2002）。植民地主義や帝国主義が可能だったのは大国の軍事的・経済的優位だけでなく植民地や被支配者に関する知識や表象によっても支えられたわけであり、それには翻訳が深く関与していたことから、そのことを一般化して翻訳のもつ知識・文化の創造性について敷衍したものであるといえる。②はカナダのサイモン（S. Simon）による見解で、フェミニズムの立場に立っている。主体が自由に越境する今日の世界において、翻訳は国民国家概念を弱め、文化の越境や偶発性による文化のダイナミックな創造を促すものとして捉えている（Simon, 2002）。③も同趣旨であると言え、翻訳により積極的に男性優位社会の歪みを是正すべきだと主張するのである。④はアメリカのゲンツラーの見解で、起点社会＝受容社会を超越した翻訳の機能・役割を概括的に捉えている（Gentzler, 2002）。翻訳は起点社会側・受容社会側という差異を超えて、社会構築・文化構築を行う機能を担っているとする。⑤も同趣旨であり、⑥は解釈学的な観点から、翻訳の一般論を説いている。



これら諸学説も、前述の（3）の議論が当てはまるが、特に介入主義型の学説は、一般の翻訳実践者・実務家には意識されない非合目的的機能を詳らかにし、将来を展望しつつその機能を積極的に意識化して社会を変革するのだ、と唱える、つまり合目的的な目標へと転化する知的動きを内包していると言える。

## 5. おわりに

以上、翻訳をめぐるメタファー（“translation as X”）の諸学説を、さまざまな定義文（・隠喩文・記述文）から見てきた。「翻訳」を言語実践行為と捉えるか社会行為と捉えるかで分析の切り口や視点が随分異なるし、後者の場合にも、どういう社会的コンテキストにおける翻訳の機能・役割を論じるかによって見解が大きく異なる。そして後者の一連の「文化的・イデオロギー的転回」を経た学説群を分析すると、マンデイ（J. Munday）が「翻訳者は介入的存在である」（Munday, 2007, p. xv）とする「介入としての翻訳」が基底となっていて、それがどういう歴史的場面で適用されるか、どういう社会的側面に焦点を当てているかによって力点の置き方が異なるとも言う。

メタファーはコンテキスト負荷性（社会指標性の負荷性）とイデオロギー負荷性（象徴性の負荷性）を帯有していることは社会記号論の学知から明らかである。類像性のみに着目した認知言語学の領野でのメタファー論は、言語研究と文化・社会研究の相互依存性（言語人類学系社会記号論の特徴）や言語研究と文化・社会研究の結節点としての語用論（コミュニケーション）研究の観点から、再考を要することもここで確認された。

## 参考文献

- Angelelli, C. V. (2004a). *Revisiting the interpreter's role*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Angelelli, C. V. (2004b). *Medical interpreting and cross-cultural communication*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Bassnett, S. & Lefevere, A. (Eds.), (1990). *Translation, history and culture*. London & New York: Routledge.
- Black, M. (1962). *Models and metaphors*. Ithaca, NY: Cornell University Press.
- Boldiszar, I. (1979). *Small counties, great literatures?* Budapest: Publishers & Booksellers Association.
- Boyd, R. (1979). “Metaphor and theory change: What is ‘metaphor’ a metaphor for?” In A. Ortony (Ed.), *Metaphor and thought*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Buzelin, H. (2005). “Unexpected allies: How Latour’s network theory could complement Bourdieusian analyses in translation studies.” *The translator*, 11(2), 193-218.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation*. Amsterdam & Philadelphia: John

Benjamins.

Chesterman, A. (2007). "On the idea of a theory". *Across* 8(1): 1-16.

Chesterman, A. (2008). "The status of interpretive hypotheses". In G. Hansen et al. (Eds.), *Efforts and models in interpreting and translation research*. (pp. 49-61). Amsterdam & Philadelphia: Benjamins.

Cronin, M. (1996). *Translating Ireland: Translation, languages and identity*. Cork: Cork University Press

Cronin, M. (2002). "The empire talks back: Orality, heteronomy, and the cultural turn in interpretation studies". In M. Tymoczko & E. Gentzler (Eds), (2002). *Translation and power*. (pp. 45-62). Amherst & Boston: University of Massachusetts Press.

Fauconnier, G. (1997). *Mental in thought and language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Fauconnier, G. & Turner, M. (1998). "Principles of conceptual integration". In J-P. Koenig (Ed.), *Discourse and cognition: Brindging the gap*. (pp. 269-283). Stanford: CSLI.

Gauvin, L. (1989). *Letters from an Other*. translated by S. de Lotbiniere-Harwood. Toronto: Women's Press.

Gentzler, E. (2002). "Translation, poststructuralism, and power". In M. Tymoczko & E. Gentzler (Eds.), (pp. 195-218).

Grady, J. (1997). *Foundation of meaning: Primary metaphors and primary scene*. Ph.D. dissertation, University of California, Berkeley.

Gutt, E. A. (1991/2000). *Translation and relevance: Cognition and context*. Manchester: St. Jerome Publishing.

Hermans, T. (1999). *Translation in systems: Descriptive and systemic approaches explained*. Manchester: St. Jerome Publishing.

Hermans, T. (2007). *The conference of the tongues*. Manchester. St. Jerome Publishing.

Holtz-Mänttari, J. (1984). *Translatorisches Handeln: Theory, methodology and didactic application of a model for translation-oriented text analysis*. Amsterdam: Rodopi.

Jaffe, A. (1999). "Locating power: Corsican translators and their critics". In J. Blommaert (Ed.), *Language ideological debates* (pp. 39-66). Berlin & New York: Mouton de Gruyter.

Johnson, M. (1987). *The body in the mind: The bodily basis of meaning, imagination, and reason*. Chicago: University of Chicago Press.

Kenan, L. (2002). "Translation as a catalyst for social change in China". In M. Tymoczko & E. Gentzler (Eds.), (pp. 160-183).

Lakoff, G. (1993). "The contemporary theory of metaphor". In A. Ortony (Ed.). *Metaphor and thought*. (pp. 202-251). Cambridge: Cambridge University Press.

Lakoff, G. & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago.

Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting and the manipulation of literary frame*. London & New York: Routledge.

- Levine, S. J. (1991). *The subversive scribe: Translating Latin American fiction*. St Paul, MN: Graywolf Press.
- Maier, C. (2007). "The translator as an intervenient being". In J. Munday (Ed.), (2007). *Continuum studies in translation: Translation as intervention*. (pp. 1-17). London & New York: Continuum International Publishing Group.
- Mossop, B. (2007). "The translator's intervention through voice selection". In J. Munday (Ed.), (2007). *Continuum studies in translation: Translation as intervention*. (pp. 18-37). London & New York: Continuum International Publishing Group.
- Munday, J. (Ed.), (2007). *Continuum studies in translation: Translation as intervention*. London & New York: Continuum International Publishing Group.
- Munday, J. (2008/2012). *Introduction to translation studies*. London & New York: Routledge.
- Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford: Pergamon Press.
- Newmark, P. (1988). *A textbook of translation*. London: Prentice Hall.
- Niranjana, T. (1992). *Siting translation: History, post-structuralism, and the colonial context*. Berkeley, CA: University of California Press.
- Pöchhacker, F. (2004). *Introducing interpreting studies*. London & New York: Routledge.
- Pöchhacker, F. & Shlesinger, M. (Eds.), (2007). *Healthcare interpreting*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Pym, A. (2006). "On the social and cultural in translation studies." In A. Pym, M. Shlesinger & J. Jettmarova (Eds.), (2006). (pp. 1-25).
- Pym, A., Shlesinger, M. & Jettmarova, J. (Eds.), (2006). *Sociocultural aspects of translating and interpreting*. Amsterdam & Philadelphia: Benjamins.
- Reiß, K. & Vermeer, H. J. (1984/1991). *Grundlegung einer allgemeinen Translationstheorie*. (2. Auflage.) Tübingen : Niemeyer.
- Simeoni, D. (1998). "The pivotal status of the translator's *habitus*". *Target*, 10(1), 1-39.
- Simon, S. (2002). "Germaine de Stael and Gayatri Spivak: Culture brokers". In M. Tymoczko & E. Gentzler, (Eds), (2002). *Translation and power*. (pp. 122-140). Amherst & Boston: University of Massachusetts Press.
- Snell-Hornby, M. (2006). *The turns of translations studies: New paradigms or shifting viewpoints?*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Steiner, G. (1998). *After Babel*. Oxford: Oxford University Press
- Toury, G. (2012). *Descriptive translation studies and beyond*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Tymoczko, M. (2003). "Ideology and the position of the translator: In what sense is a translator "In-between"?" In M. C. Perez (Ed.), *Apropos of ideology. Translation studies on ideology—Ideologies in translation studies* (pp. 181-201). Manchester: St Jerome.
- Tymoczko, M. & Gentzler, E. (Eds.), (2002). *Translation and power*. Amherst & Boston: University of Massachusetts Press.

- Venuti, L. (1993). "Translation as cultural politics: Regimes of domestication in English". *Textual Practice*, 7, 208-223.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
- Venuti, L. (1998/2008). *The scandals of translation: Towards an ethics of difference*. London & New York: Routledge.
- Vinay, J.-P. & Darbelnet, J. (1958). *Stylistique comparee du francais et de l'anglais*. Paris: Didier. translated and edited into English by Sager, J.C. & Hamel, M.J. (1995). *Comparative stylistics of French and English: A methodology for translation*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Wolf, M. (2000). The third space in postcolonial representation. In S. Simon & P. St Pierre (Eds.), *Changing the terms: Translating in the postcolonial era*. (pp.127-45). Ottawa: University of Ottawa Press.
- Wolf, M. & Fukari, A. (Eds), (2007). *Constructing a sociology of translation*. Amsterdam & Philadelphia : John Benjamins Publishing Company.
- Yameng, L. (2007). "Towards 'representational justice' in translation practice" In J. Munday, (Eds), (2007). *Continuum studies in translation: Translation as intervention*. (pp. 54-70). London & New York: Continuum International Publishing Group.
- ブルデュー, P. (1993). 『話すということ一言語的交換のエコノミー』(稲賀繁美・訳). 藤原書店. [原著: Bourdieu, P. (1982). *Ce que parler veut dire : economie des echanges linguistique*. Paris: Fayard].
- 平賀正子 (1992). 「詩における類像性について」日本記号学会 (編)『ポストモダンの記号論: 情報と類像』73-85頁. 東海大学出版会.
- 河原清志 (2008). 「ことばの意味の多次元性: "as" の事例分析」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出修士論文 [未出版].
- 河原清志 (2009). 「諸形態の通訳・翻訳をめぐるメタファーと通訳・翻訳者／行為の役割論」日本通訳翻訳学会第10回年次大会口頭発表 (2009年9月金城学院大学).
- 河原清志 (2015a). 「翻訳等価性再考—社会記号論による翻訳学のメタ理論研究」立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科提出博士学位申請論文 [未刊行].
- 河原清志 (2015b). 「翻訳学におけるイデオロギー研究の潮流の社会記号論による分析」『金城学院大学論集』第11巻第2号, 40-57頁.
- 河原清志 (2015c). 「翻訳規範と記述的翻訳研究の批判的検討」日本通訳翻訳学会翻訳研究育成プロジェクト (編)『翻訳研究への招待』第13号, 1-28頁.
- 小林修一・福山隆夫 (1991). 『社会のイメージ—社会学的メタファーの諸相』梓出版社.
- 小山亘 (2009). 『記号の思想』三元社.
- 小山亘 (2011). 「社会言語学的多様性と翻訳不可能性: メタ語用、言語変種／接触、社会指標性と記号論の全体」翻訳論研究会講演会 (日本記号学会研究プロジェクト) 招待講演資料 (2011年3月大阪大学豊中キャンパス待兼山会館会議室).

- メイ, J. (2005). 『批判的社会語用論入門：社会と文化の言語』(小山亘・訳). 三元社. [原著：  
Mey, J. L. (2001). *Pragmatics: An introduction*. Oxford: Blackwell].
- 田邊敏明 (2000). 『比喩から学ぶ心理学—心理学理論の新しい見方』北大路書房.
- 田中茂範 (2002). 「『A は B である』をめぐって：記述文・定義文・隠喩文の基本形式」山田  
進・菊地康人・柊山洋介 (編) 『日本語：意味と文法の風景：国広哲弥教授古稀記念論文集』  
(15-30頁). ひつじ書房.
- 田中茂範・深谷昌弘 (1998). 『＜意味づけ論＞の展開』紀伊国屋書店.
- 谷口一美 (2003). 『認知意味論の新展開 メタファーとメトニミー』研究社.
- 吉田忠 (2000). 「『解体新書』から『西洋事情』へ—言葉をつくり、国をつくった蘭学・英学期  
の翻訳」芳賀徹 (編) (2000). 『翻訳と日本文化』(50-66頁). 山川出版社.